

2011 年度 建築学科

自己点検・評価報告書

2012 年 3 月 31 日

目次

1. 理念・目的	
1-1. 教育目標とアドミッションポリシー、ディプロマポリシーとの整合	1
1-2. その他	3
2. 教員・教員組織	
2-1. 方針（目標）に沿った教員構成、能力・資質等の明確化	5
2-2. 学群における人事計画の適切性	6
2-3. その他	6
3. 教育内容・方法・成果	
3-1. 学習・教育目標とカリキュラムとの整合性（教育体系の構築）	7
3-2. 授業科目と担当教員の整合性	11
3-3. シラバスに基づく授業の実施	14
3-4. 卒業研究の指導状況	17
3-5. 具体的な取組内容と成果（FD/授業改善）	18
3-6. 学生支援	20
3-7. その他	20
4. 学科（学群）等運営の貢献	
4-1. 学科運営への協力状況	21
4-2. 学科運営方法	22
4-3. その他	22
5. その他特記事項	
5-1. 卒業生の社会評価など	23
5-2. その他	23

1. 理念・目的

1-1 教育目標とアドミッションポリシー、ディプロマポリシーとの整合

《現状説明》

建築学科では、当学科に入学した学生が4年間に学修すべき能力を提示するため、以下の通り、教育理念、教育目標を設定し、それに対応してアドミッションポリシー、ディプロマポリシーを整備している。2010年度より、「学修の手引」にこれらを掲載するとともに、入学時や各学期はじめに行うガイダンスの場で、周知徹底している。

【教育理念】

人間は、自らの生活を支えるために、建築を含むさまざまな生活環境をつくってきた。建築学科では、その生活環境について、歴史を検証し、現代社会での問題を探り、新しい時代の人間や社会にとってより良い生活環境をつくり出すための教育を行うことを目指している。そのため、建築を「いかにつくるか」だけでなく、「何のためにつくるか」を大切にしており、人間生活にかかわるあらゆる分野の活動に強い興味をもって教育・研究を行っている。したがって、歴史、宗教、芸術、政治、経済から最先端の科学技術までが、その範囲に入っている。そうした幅広い認識に立って、優れた解析力を持ち、同時に造形感覚にあふれた統合力によって人間のための生活空間をつくり出していける素養と意欲を持つ若者を育てることを教育理念としている。

【教育目標】

- A 歴史的発展を含めた技術の事象を理解する。
- B 技術と関連する普遍的法則としての科学を理解する。
- C 技術が現実社会に現象している状況を認識し、そこでの問題点を提起できる。
- D 技術の実践を通じてつくることの意味を認識する。

【アドミッションポリシー】

建築学科では、人間の生活に深く関係する建築物やその環境について歴史を検証し、現代社会が抱える安全性や機能性などの基本的な問題を探り、新しい時代の人間や社会にとってより良い生活環境をつくり出すための教育・研究を行っています。例えば、建築を「いかにつくるか」だけでなく、「何のためにつくるか」を大切にしており、人間生活に関わるあらゆる分野の活動に強い関心を持つことを重視しています。すなわち、自然科学系や人文科学系の基礎的な知識の習得に加えて、建築的な視野で宗教・芸術・政治・経済・哲学・心理学・科学・工学等から最先端の科学技術までその範疇に入れて理解することを重視しています。そうした幅広い認識に立って、優れた分析・解析力を持ち、同時に造形感覚に溢れた総合力によって人間のための生活空間をつくり出していける素養と意欲を持つ若者を育成することを大きな目標としています。

【デュプロマポリシー】

建築学科では、アドミッションポリシーに基づき、それらの実現のために学生が身につける素養として、以下のような事項を求めています。

- (1) 「歴史的発展を含めた技術の事象を知ること」
- (2) 「技術と関連する普遍的法則としての科学を学ぶこと」
- (3) 「技術が現実社会に現象している状況を認識し、その問題点を提起すること」
- (4) 「技術の実践を通じてつくることの意味を考えること」
- (5) 「豊かな人間性や社会性およびコミュニケーション能力を発揮し、社会に貢献する」

《点検・評価》

建築学科教室会議の場にて、教育理念、教育目標、アドミッションポリシー、デュプロマポリシーについて定期的に議論を行うことにより、P D C A活動を継続的に実践し、社会が求める多様な人材を育成していることを確認して、必要な改正が適宜適時に実施できる体制をとっている。

《将来に向けた発展方策》

建築学科卒業生を毎年、卒業生講演会や里帰りゼミとして大学に招き、社会での実体験を踏まえて意見交換する機会を設けており、卒業後の社会におけるニーズを踏まえた、継続的改善を実施する体制をとっている。

《根拠資料》

1. 学修の手引(工学部) 2010 年度版、同 2011 年度版
2. 建築学科会議議事録
3. 建築学科ウェブサイト (<http://www.arc.shibaura-it.ac.jp/>)

1. 理念・目的

1-1 教育目標とアドミッションポリシー、ディプロマポリシーとの整合

《現状説明》

建築学科では、当学科に入学した学生が4年間に学修すべき能力を提示するため、以下の通り、教育理念、教育目標を設定し、それに対応してアドミッションポリシー、ディプロマポリシーを整備している。2010年度より、「学修の手引」にこれらを掲載するとともに、入学時や各学期はじめに行うガイダンスの場で、周知徹底している。

【教育理念】

人間は、自らの生活を支えるために、建築を含むさまざまな生活環境をつくってきた。建築学科では、その生活環境について、歴史を検証し、現代社会での問題を探り、新しい時代の人間や社会にとってより良い生活環境をつくり出すための教育を行うことを目指している。そのため、建築を「いかにつくるか」だけでなく、「何のためにつくるか」を大切にしており、人間生活にかかわるあらゆる分野の活動に強い興味をもって教育・研究を行っている。したがって、歴史、宗教、芸術、政治、経済から最先端の科学技術までが、その範囲に入っている。そうした幅広い認識に立って、優れた解析力を持ち、同時に造形感覚にあふれた統合力によって人間のための生活空間をつくり出していける素養と意欲を持つ若者を育てることを教育理念としている。

【教育目標】

- A 歴史的発展を含めた技術の事象を理解する。
- B 技術と関連する普遍的法則としての科学を理解する。
- C 技術が現実社会に現象している状況を認識し、そこでの問題点を提起できる。
- D 技術の実践を通じてつくることの意味を認識する。

【アドミッションポリシー】

建築学科では、人間の生活に深く関係する建築物やその環境について歴史を検証し、現代社会が抱える安全性や機能性などの基本的な問題を探り、新しい時代の人間や社会にとってより良い生活環境をつくり出すための教育・研究を行っています。例えば、建築を「いかにつくるか」だけでなく、「何のためにつくるか」を大切にしており、人間生活に関わるあらゆる分野の活動に強い関心を持つことを重視しています。すなわち、自然科学系や人文科学系の基礎的な知識の習得に加えて、建築的な視野で宗教・芸術・政治・経済・哲学・心理学・科学・工学等から最先端の科学技術までその範疇に入れて理解することを重視しています。そうした幅広い認識に立って、優れた分析・解析力を持ち、同時に造形感覚に溢れた総合力によって人間のための生活空間をつくり出していける素養と意欲を持つ若者を育成することを大きな目標としています。

【デュプロマポリシー】

建築学科では、アドミッションポリシーに基づき、それらの実現のために学生が身につける素養として、以下のような事項を求めています。

- (1) 「歴史的発展を含めた技術の事象を知ること」
- (2) 「技術と関連する普遍的法則としての科学を学ぶこと」
- (3) 「技術が現実社会に現象している状況を認識し、その問題点を提起すること」
- (4) 「技術の実践を通じてつくることの意味を考えること」
- (5) 「豊かな人間性や社会性およびコミュニケーション能力を発揮し、社会に貢献する」

《点検・評価》

建築学科教室会議の場にて、教育理念、教育目標、アドミッションポリシー、デュプロマポリシーについて定期的に議論を行うことにより、PDC A活動を継続的に実践し、社会が求める多様な人材を育成していることを確認して、必要な改正が適宜適時に実施できる体制をとっている。

《将来に向けた発展方策》

建築学科卒業生を毎年、卒業生講演会や里帰りゼミとして大学に招き、社会での実体験を踏まえて意見交換する機会を設けており、卒業後の社会におけるニーズを踏まえた、継続的改善を実施する体制をとっている。

《根拠資料》

1. 学修の手引(工学部) 2010 年度版、同 2011 年度版
2. 建築学科会議議事録
3. 建築学科ウェブサイト (<http://www.arc.shibaura-it.ac.jp/>)

1-2 その他

1-2-1 理念・目的の、大学構成員（教職員および学生）への周知、社会への公表

《現状説明》

(1) 周知・公表の内容と方法

建築学科の教育理念については、下記の内容を大学ホームページおよび建築学科ホームページに掲載し、大学構成員（教職員および学生）への周知、社会への公表を行っている。

「人間がこれまで営々と積み重ねてきた歴史を検証し、現代社会の問題を探り、新しい時代の人間や社会にとってより良い生活環境を提案する。そのための理解力と、優れた創造性と造形感覚が統合された能力を併せ持つ人材を育成する。そのために歴史を基礎として、計画、都市、環境、構造、生産の各系でカリキュラムを構成しており、各教育・研究がなされている。歴史に責任のある立場だから常に批評する目を忘れないでほしい。」

(2) 建築学科学生への周知

新入生については、4月のオリエンテーション期間中に「プレゼミ」を学科教員全員が参加の上、実施し、教育理念と目標を説明している。

2年生以上の在学生については、各学期初めにオリエンテーションを実施し、教育理念、目標を確認するとともに、各学年の学修内容との関係について説明、対話を行っている。

《点検・評価》

毎夏、全国9会場で実施している父母懇談会においても、建築学科の教育理念、目標について説明を行い、参加した保護者や保証人に対して、周知を図っている。

《将来に向けた発展方策》

毎夏、大学キャンパスにて実施しているオープンキャンパスにおいても、建築学科の教育理念、目標について周知を行い、高校生やその保護者、高校教員等に対して、周知を図っているが、その効果を高めていきたい。

《根拠資料》

1. 学修の手引(工学部) 2010年度版、同 2011年度版
2. 建築学科会議議事録
3. 建築学科ウェブサイト (<http://www.arc.shibaura-it.ac.jp/>)

1-2-2 理念・目的の適切性に関する定期的検証

《現状説明》

建築学科教室会議の場にて、定期的、継続的に議論を行うことにより、PDCA活動を実践し、必要な改善ができる体制をとっている。

《点検・評価》

建築学科教室会議の場にて、定期的、継続的に議論を行い、必要な改善を行っている。

《将来に向けた発展方策》

引き続き、建築学科教室会議の場にて、定期的、継続的に議論を行い、PDCA活動により、必要な改善を実施する。

《根拠資料》

1. 学修の手引(工学部) 2010 年度版、同 2011 年度版
2. 建築学科会議議事録
3. 建築学科ウェブサイト (<http://www.arc.shibaura-it.ac.jp/>)

2. 教員・教員組織

2-1 方針に沿った教員構成、能力・資質等の明確化

《現状説明》

下記の分野を専門とする 12 名の専任教員を配置することにより教育理念、教育目標、ディプロマポリシーに対応した教育・研究を行っている。教員の多くは実務経験を有しており、卒業後の社会のニーズに対応した教育を実践できる教員組織となっている。2011年4月における専任教員の主な担当科目を以下に示す。

1. 建築材料・施工（建築材料、建築施工）
2. 建築耐震工学（鉄筋コンクリート構造、耐震工学）
3. 建築構造（鉄筋コンクリート構造、杭基礎構造、プレストレス・コンクリート構造、地震応答解析、耐震診断および耐震補強）
4. 建築構造設計（構造設計、空間構造）
5. 建築空間（建築計画、建築設計、意匠）
6. 建築・住環境計画（建築設計）
7. 地域デザイン（まちづくり、都市計画、市民参加）
8. 建築環境工学（IAQ（室内換気質）、建築室内環境、クリーンルーム）
9. 建築環境・音響（建築環境・設備工学、空間音響、建築音響設計）
10. 建築振動・防災（地盤・建物の常時微動の応用、建物の立体振動性状の把握方法）
11. 建築・環境設計（建築設計、計画、意匠）
12. 建築史（寺社・民家・町家・近代建築・近代産業遺産・近代土木遺産）
13. 建築・設計（建築設計、環境設計、建築計画、建築意匠）
14. 建築構法計画（建築計画・構法計画、建築設計）

他に、教育支援センター特任教員、2名が教育を担当している。

《点検・評価》

建築学科教室会議の場にて、定期的、継続的に議論を行うことにより、PDCA活動を実践し、必要な改善ができる体制をとっている。専任教員については、近年、重要性が増している環境分野の専任教員が不足しているため、定年退職に伴う補充に合わせて、2011年4月に1名、採用した。構造系教員についても、定年退職に伴う補充に合わせて、2011年4月に1名、採用している。

各教員はクラス担任として、あるいは卒業研究の指導教員として、学生の教育指導に当たっているが、その指導内容については教室会議などの場で情報共有、議論を行い、その質の向上に努めている。

《将来に向けた発展方策》

建築学科教室会議の場にて、継続して議論を行うことにより、PDCA活動を実践し、社会のニーズに対応した必要な改善ができる体制の充実を図っている。

先端的技術、社会的動向などについては、社会で活躍する実務経験者や行政関係者を、特別講師招聘制度を活用して招き、教育内容の向上に努めている。

《 根拠資料 》

1. 学修の手引(工学部) 2010 年度版、同 2011 年度版
2. 建築学科会議議事録
3. 建築学科ウェブサイト (<http://www.arc.shibaura-it.ac.jp/>)

2-2 学群における人事計画の適切性

《現状説明》

建築・土木学群では各学科の独自性を尊重しつつ、専門分野・年齢構成等の意見交換をしたのちに、各学科の人事を承認するようにしている。

専任教員の昇格・任用及び専任教員採用計画については、中長期的な視点に立ち、教室会議で検討を行うとともに、教室会議の検討内容を学群会議にて審議し、昇格・任用及び専任教員採用に関する要求を上申している。建築学科専任教員は30歳台から60歳代まで年齢に偏りのないよう配置されており、学科全体でバランスのよい構成となっている。

非常勤教員についても、教室会議での検討、学群会議の審議を行い、公募により、必要な人材を広く求めるように努めている。

《点検・評価》

専任教員については、教室会議で中長期的な視点に立ち、検討が行われており、異動時期に適切な教員を採用できるように進めている。また公募により必要な人材を広く求めている。

《将来に向けた発展方策》

現在、専任教員が定年退職する時期にあたるため、重要性が増している分野の専任教員の充足を図っている。

《 根拠資料 》

1. 学修の手引(工学部) 2010 年度版、同 2011 年度版
2. 建築学科会議議事録
3. 建築学科ウェブサイト (<http://www.arc.shibaura-it.ac.jp/>)

2-3 その他

特になし

3. 教育内容・方法・成果

3-1 学習教育目標とカリキュラムとの整合性（教育体系の構築）

3-1-1 教育目標に基づく学位授与方針の明示

《現状説明》

建築学科では、アドミッションポリシーに基づき、それらの実現のために学生が身につける素養として、以下のような事項をディプロマポリシー（学位認定方針）として、求めている。

- (1) 歴史的発展を含めた技術の事象を知ること
- (2) 技術と関連する普遍的法則としての科学を学ぶこと
- (3) 技術が現実社会に現象している状況を認識し、その問題点を提起すること
- (4) 技術の実践を通じてつくることの意味を考えること
- (5) 豊かな人間性や社会性およびコミュニケーション能力を発揮し、社会に貢献する

建築学科は、学部レベルでは特定の専門分野に偏らず、幅広く学ぶことが大切であり、これはより高度な内容を学ぶときに極めて重要な要素となると考えている。そのため、共通科目についても、学生の主体性により、できるだけ幅広く学修することを重視している。

《点検・評価》

建築学科教室会議の場にて、定期的、継続的に議論を行うことにより、PDCA活動を実践し、必要な改正ができる体制をとっている。

《将来に向けた発展方策》

建築学科教室会議の場にて、定期的、継続的に議論を行うことにより、PDCA活動を実践し、将来に向けた必要な改正ができる体制をとっている。

《根拠資料》

1. 学修の手引(工学部) 2010 年度版、同 2011 年度版
2. 建築学科会議議事録
3. 建築学科ウェブサイト (<http://www.arc.shibaura-it.ac.jp/>)

3-1-2 教育目標に基づく教育課程の編成・実施方針の明示

《現状説明》

(1) 教育目標に基づく教育課程の編成

建築学科が対象とする領域は、人間がつくり出す生活環境全般にわたる。すなわち、室内空間から建築、建築の集合体、建築の外部空間である広場、公園、道、あるいは地域社会や都市など、人間の生活空間を構成するあらゆるものにおよんでいる。それらを学び、研究するために、授業科目を次の4つの視点で整理し、カリキュラムを組み立てている。

- A 歴史的発展を含めた技術の事象を理解する。
- B 技術と関連する普遍的法則としての科学を理解する。
- C 技術が現実社会に現象している状況を認識し、そこでの問題点を提起できる。
- D 技術の実践を通じてつくることの意味を認識する。

(2) 教育目標に基づく教育課程の実施方針

建築学科では、上記A～Dを4つのステージと呼び、授業科目のそれぞれのステージに応じて教育する体制を整えており、同時に学生に対しては自ら問題を設定し自主的に学ぶ姿勢を強く望んでいる。科学や技術が現実社会の諸相に直面したとき、それがどのような主体によって、どのような目的でどうかかわりあい、その結果が本来的有用性とどのように結びついているかを検証する力を養うことが肝要である。その意味からテーマを総合的にとらえる設計科目を重視しており、ここでその他各種の総括的かつ専門的視点から提供される多面的な学習機会を積極的にとらえ、人間のための生活環境をつくるために己の価値観を涵養し、有意義な技術を習得し、考える力を養うことに努めるよう教育している。

《点検・評価》

建築学科教室会議の場にて、定期的、継続的に議論を行うことにより、PDCA活動を実践し、必要な改正ができる体制をとっている。

《将来に向けた発展方策》

建築学科教室会議の場にて、定期的、継続的に議論を行うことにより、PDCA活動を実践し、必要な改正ができる体制をとっている。

《根拠資料》

1. 学修の手引(工学部) 2010 年度版、同 2011 年度版
2. 建築学科会議議事録
3. 建築学科ウェブサイト (<http://www.arc.shibaura-it.ac.jp/>)

3-1-3 教育目標、学位授与方針および教育課程の編成・実施方針の大学構成員（教職員および学生等）への周知、社会への公表

《現状説明》

建築学科教室会議の場にて、定期的、継続的に議論を行うことにより、PDCA活動を実践し、教職員への周知を徹底している。

新入生については、4月のオリエンテーション期間中に「プレゼミ」を学科教員全員が参加の上、実施し、教育目標、学位授与方針および教育課程の編成・実施方針を説明している。

2年生以上の在学生については、各学期初めにオリエンテーションを実施し、教育目標、学位授与方針および教育課程の編成・実施方針を説明し、学生が各自の学修計画を検討する際に反映できるように実施している。

《点検・評価》

新入生については、4月のオリエンテーション期間中に、2年生以上の在学生については、各学年初めにオリエンテーションを実施し、教育目標、学位授与方針および教育課程の編成・実施方針を説明しており、学生が主体的に学修計画を検討できるように対応している。

《将来に向けた発展方策》

オープンキャンパスにおいて、各学年の履修内容を展示・解説を行っており、入学予定者に対する周知も充実させている。

《根拠資料》

1. 学修の手引(工学部) 2010 年度版、同 2011 年度版
2. 建築学科会議議事録
3. 建築学科ウェブサイト (<http://www.arc.shibaura-it.ac.jp/>)

3-1-4 教育目標、学位授与方針および教育課程の編成・実施方針の適切性に関する定期的検証

《現状説明》

建築学科では、全専任教員で構成される教室会議において、教育目標に沿った学科カリキュラムの検討をはじめ、教育目標、学位授与方針および教育課程の編成・実施方針の適切性に関する定期的検証を綿密に行っている。建築学科教室会議の場にて、定期的、継続的に議論を行うことにより、PDCA活動を実践し、必要な改正が円滑に実施できる体制をとっている。

《点検・評価》

カリキュラムに示されている教育内容の実施状況の情報交換、問題点の把握と解決方法の検討、学生の動機の維持、理解度・進展度の把握や、興味の持ち方、さらには適性や社会の需要との関係、などを検討し、学生のレベルとカリキュラムの目標との整合性の確認と綿密な修正を行っている。

《将来に向けた発展方策》

主たるカリキュラムと同様に、付随する学科主催の各種行事についても、教室会議での検討を積み重ねて、きめ細かい対応を心がけている。

《根拠資料》

1. 学修の手引(工学部) 2010 年度版、同 2011 年度版
2. 建築学科会議議事録
3. 建築学科ウェブサイト (<http://www.arc.shibaura-it.ac.jp/>)

3-2 授業科目と担当教員の整合性

3-2-1 教育課程の編成・実施方針に基づく授業科目の開設、教育課程の体系的編成

《現状説明》

建築学科では、まず最初に「歴史」を学ぶ。建築物はそれぞれの時代の文化が生みだしてきたもので、常に人間の営みと密着して発展してきた。現在の私たちはその文化を、いいものは受け継ぎ、問題のあるものは改善して、後世へと伝えていく必要がある。そのためにも歴史を学ぶことで、そこから普遍的な原理を導き出し、未来を考える上での参考としなければならない。他の工業製品と違い、建築物は道路などと同じ都市空間のインフラであり、未来への遺産となるものである。建築に関わるものは、これからの歴史に大きな責任を負っていると言える。

上記の教育課程の編成・実施方針に基づき、建築学科の授業科目は、歴史を基礎として、計画、都市、環境、構造、生産の各系で構成されている。

《点検・評価》

それぞれの科目において、学内外で活躍中の専任教員をはじめ、各分野において実績のある非常勤教員が、質の高い少人数教育を展開している。単なる技術者を育てるのではなく、社会の問題や真理に対して鋭い評価の目をもち、現在から未来をどう創造していくか、生活環境・都市環境を何のために、人々のどういう生活のために、それらをどう整えていくかが考えられる人材を育てることを目指して、授業科目、教育課程を体系的に編成している。

専任教員のプロフィールと講義科目は教員プロフィール、学科 HP にて公開されている。専任教員と非常勤教員の意見交換会を定期的を開催し、教育の質の向上を図っている。

《将来に向けた発展方策》

学会等で活動実績のある専任教員をはじめ、各分野において実績のある教員が、質の高い少人数教育を展開している。

《根拠資料》

1. 学修の手引(工学部) 2010 年度版、同 2011 年度版
2. 建築学科会議議事録
3. 建築学科ウェブサイト (<http://www.arc.shibaura-it.ac.jp/>)

3-2-2 教育課程の編成・実施方針に基づく教育内容の提供

《現状説明》

「建築学科の専門科目」については、工学部全体のカリキュラムの編成方針を踏まえながらも、特に次の点に留意して組み立てている。

1) 全体の統一を図りながら、個々の授業科目はコンパクトにまとめている。

広い建築分野を網羅するとともに、全体の統一も図るため、個々の授業科目はコンパクトにまとめられている。時間割（開講年次）も、前後を配慮して組まれている。特に1年で開講される「建築の形態と空間」「建築構造・環境概説」「建築製図基礎」は、建築の各専門分野へのアプローチを容易にすることを目的としている。

2) 必修科目、選択必修科目は厳選し、選択科目を多く設けている。

単位区分については、学生の自由な履修を促すために必修科目と選択必修科目の数は極力抑え、他は選択科目とした。選択必修科目は、3年以降の「設計演習系科目」と「建築実験」に限られる。

3) 講義は厳選し、体験的な科目を数多く設定している。

演習、実験、実習、製図、ゼミナール、卒業研究などの体験的な科目を多く設けている。ここには「講義を補強するための演習」や「建築設計演習、設計製図」のほか「建築材料施工実験、建築環境実験、建築構造実験」「建築実習」「建築ゼミナール」「卒業研究」などがあり、それぞれ体験的に学ぶことに意味がある。

4) 「建築ゼミナール1, 2」は、学生を少人数のグループに分け、建築学科の全教員が指導にあっている。

5) 設計演習製図系科目を重視している。

建築学科の特徴でもある「設計演習製図系科目」は、建築をより深く理解するために必要な科目として重視しており、各分野の実務経験の豊富な教員が複数で指導にあっている。

6) 卒業研究を総括として位置づけている。

「卒業研究」を全ての授業科目の総括として位置づけている。そのため他の授業科目を110単位以上取得していなければ着手することができないこととしている。

7) 学科独自の教育も行う。

カリキュラムに位置づけられた授業科目に加えて「1年生のプレゼミ」「デザインチャンピオンシップ」「講演会」など学科独自の教育を実施している。

《点検・評価》

広い建築分野を網羅するとともに、全体の統一も図るため、個々の授業科目はコンパクトにまとめられている。時間割（開講年次）も、前後を配慮して組まれている。演習、実験、実習、製図、ゼミナール、卒業研究などの体験的な科目を多く設け、体験的に学べるようになっている。

《将来に向けた発展方策》

学生の主体性を重んじ、自由な履修を促すため、必修科目と選択必修科目の数は極力抑え、他は選択科目としている。

《 根拠資料 》

1. 学修の手引(工学部) 2010 年度版、同 2011 年度版
2. 建築学科会議議事録
3. 建築学科ウェブサイト (<http://www.arc.shibaura-it.ac.jp/>)

3-2-3 教育方法および学習指導

《現状説明》

(1) 教育目標の達成に向けた授業形態（講義・演習・実験等）の採用

建築学科では、学部レベルでは、特定の専門分野に偏らず、幅広く学ぶことが大切であり、これはより高度な内容を学ぶときに極めて重要な要素となると考えており、専門科目についてコース制を設けてはいない。国家試験などでも、幅広い専門基礎知識を求められる傾向にあり、学生の将来の可能性を考え、広く学べる機会を提供している。

(2) 履修科目登録の上限設定、学習指導の充実

工学部において定めている必要単位数に満たない学業成績不振者に対しては、各学期初めにクラス担任が面談を行い、適切な履修計画、学修計画を定めるように指導している。4年生においては、取得単位数が 110 単位未満の学生には卒業研究の履修をさせないこととしており、4年間における無理のない学修が実現できるように学修指導を行っている。

(3) 学生の主体的参加を促す授業方法

建築ゼミナール 1、建築ゼミナール 2 を実施し、学生が主体的に議論を行い、自主的に学べる機会を設けている。

(4) 他学科開講科目の履修

他学科開講科目の履修も認めているが、建築学科の開講科目と類似した内容の科目は、原則として卒業に必要な単位数に算入することは認めていない。

《点検・評価》

学業成績不振者に対しては、各学期にクラス担任が面談を行い、適切な履修計画、学修計画を定めるように指導している。4年生においては、取得単位数が 110 単位未満の学生には卒業研究の履修をさせないこととしており、4年間における無理のない学修が実現できるように学修指導を行っている。

《将来に向けた発展方策》

学生の将来の可能性を考え、幅広い専門基礎知識について、広く学べる機会を提供している。

《 根拠資料 》

1. 学修の手引(工学部) 2010 年度版、同 2011 年度版
2. 建築学科会議議事録
3. 建築学科ウェブサイト (<http://www.arc.shibaura-it.ac.jp/>)

3-3 シラバスに基づく授業の実施

《現状説明》

大学設置基準に基づき前期・後期とも15週の講義時間を確保しており、シラバスも15週の授業計画をホームページ上で公開し、明示している。授業計画に加えて、授業概要、学習・教育目標との対応、達成目標、評価方法・評価基準、教科書・参考書、履修登録前の準備、オフィスアワーに関する情報をシラバスに記載し、授業においても説明している。

建築学科では、学生の個性を生かし自由な履修を促すために選択科目の比率を多くしている。講義内容と開講時期を厳選し、演習、実験、実習、製図等の体験科目を数多く設けている。設計製図系の科目を重視しており、実務経験の多い教員が複数で指導にあたる。基本的な方針は、

1. 「建築」を理解するために、工学や設計の基礎を幅広く学ぶ。
2. 人間が営々と積み重ねてきた経験を学び、その「歴史」から、可能性と限界を学ぶ。
3. 建築とは何かを学ぶために、複数の「建築設計演習」を課す。これは、単に設計専門家を養うことを目的としているわけではなく、具体的な設計行為を通じて「建築」を総合的に学ぶことを目的としている。また、この科目群の受講を通して、自分の適性や建築分野を広く理解する。そのために、学内外の多くの専門家の指導によりきめ細かい指導を行っている。
4. 工学分野の履修により、技術の可能性と限界を正しく判断できる基礎能力を養う。これにより、より安全な美しい空間の実現が工学の進歩により実現可能となることを学び、さらなる研究開発の可能性と、他方、自然の力の大きさと技術の限界も正しく判断できる能力を得る。
5. 建築生産は、他の分野に比べて圧倒的に大きなボリュームを扱い、環境に影響を及ぼし、エネルギーの消費量も多い。これらに配慮しつつ質の高い住環境の生産手法のさらなる開発が必要である。地球環境への影響にも常に配慮し問題を解決するために必要な工学を理解し、さらに自然に対する負荷軽減・改善のための研究を進める必要がある。
6. 自然を大切にし、景観から近隣の住環境までを意識した住みよい社会実現のために必要な「まちづくり」を考える基本を身に付ける。
7. 快適であり、かつ自然に対して負荷の少ない住環境・都市環境を求めするために、常に効率的で無駄の無いエネルギーを使う工夫が今後さらに強く求められてゆく。これを正しく理解し対応できる能力を養う。
8. これらの内容がすべて密接に関係した内容が「建築」であることを理解し、問題を正しく認識して解決する能力を養うことを実践している。

《点検・評価》

学生の個性を生かし自由な履修を促すために選択科目の比率が多く、演習、実験、実習、製図等の体験科目を数多く設けている。入学時のプレゼミや2年次のテーマ合宿であるゼミナール1、3年次の建築実習（インターンシップ）、研究室別のゼミナール2などの学内外の教育を充実させ、成果をあげている。

学生は各科目のシラバスを、ホームページ「芝浦工業大学シラバス検索システム」で自由に閲覧・印刷できるようになっている。授業の評価については、「学生による授業アンケート」が行われており、担当教員はコメントを入力することにより、対応方法を公表するシステムが工学部として整備されている。これらを通して、授業改善が継続的に実施されている。

3-3-1 成績評価と単位認定

《現状説明》

(1) 厳格な成績評価（評価方法・評価基準の明示）

シラバスにおいて、評価方法・評価基準を記載し、講義においても説明することにより、成績評価を厳正に行っている。

(2) 単位制度の趣旨に基づく単位認定の適切性

建築学科教室会議にて卒業判定を行い、最終的な単位認定の確認を行っている。

(3) 既修得単位認定の適切性

建築学科教室会議にて判定を行い、編入学生などの単位認定の確認を行っている。

《点検・評価》

シラバスにおいて、評価方法・評価基準を記載し、講義においても成績評価の方法について説明している。

《将来に向けた発展方策》

建築学科教室会議にて卒業判定を行い、最終的な単位認定の確認を行っている。

《根拠資料》

1. 学修の手引(工学部) 2010 年度版、同 2011 年度版
2. 建築学科会議議事録
3. 建築学科ウェブサイト (<http://www.arc.shibaura-it.ac.jp/>)

3-3-2 教育成果に関する定期的検証、その結果に基づく教育課程、教育内容・方法の改善

《現状説明》

(1) 教育成果に関する定期的検証、その結果に基づく継続的、組織的改善

建築学科では、全専任教員で構成される教室会議において、教育成果に関する定期的検証、その結果に基づく継続的、組織的改善を定期的かつ綿密に行っている。建築学科教室会議の場にて、定期的、継続的に議論を行うことにより、PDCA活動を実践し、必要な改善が円滑に実施できる体制をとっている。

大学が実施している授業アンケート、卒業時に実施しているアンケート等を活用し、教育目標に沿った成果が得られているかを分析し、その後の教育内容、教育方法の検討に反映させている。

(2) 授業の内容および方法の改善を図るための組織的研修・研究の実施

大学、学部が実施するFSDS研修、外部機関が実施する講習会などに積極的に参加することにより、授業内容および授業方法の改善を継続的に行うようにしている。

《点検・評価》

(1) 教育成果に関する定期的検証、その結果に基づく継続的、組織的改善

教室会議において、教育成果に関する定期的検証、その結果に基づく継続的、組織的改善を行っている。教室会議の場にて、定期的、継続的に議論を行うことにより、PDCA活動を実践し、必要な改善が円滑に実施している。また大学が実施している授業アンケート、卒業時に実施しているアンケート等を活用し、教育目標に沿った成果が得られているかを分析し、その後の教育内容、教育方法の検討に反映させている。

(2) 授業の内容および方法の改善を図るための組織的研修・研究の実施

大学、学部が実施するFSDS研修、外部機関が実施する講習会などに参加することにより、授業内容および授業方法の改善を継続的に行っている。

《将来に向けた発展方策》

(1) 教育成果に関する定期的検証、その結果に基づく継続的、組織的改善

引き続き、教室会議において、教育成果に関する定期的検証、その結果に基づく継続的、組織的改善を行う。教室会議の場にて、定期的、継続的に議論を行うことにより、PDCA活動を実践する。授業アンケート、卒業時に実施しているアンケート等を活用し、教育目標に沿った成果が得られているかを分析し、その後の教育内容、教育方法の検討に反映させる。

(2) 授業の内容および方法の改善を図るための組織的研修・研究の実施

大学、学部が実施するFSDS研修、外部機関が実施する講習会などに参加することにより、授業内容および授業方法の改善を継続的に行う。

《根拠資料》

1. 学修の手引(工学部) 2010 年度版、同 2011 年度版
2. 建築学科会議議事録
3. 建築学科ウェブサイト (<http://www.arc.shibaura-it.ac.jp/>)

3-4 卒業研究の指導状況

《現状説明》

学修の総括として各自テーマを選び、教員の指導のもとで研究を行ない、その結果を論文又は設計作品としてまとめている。卒業研究の履修に際しては、3年次後期までの取得単位数が110単位以上であることが卒業研究着手の条件としている。なお、履修上の注意やスケジュールの詳細については、別途「卒業研究ガイダンス」を行なって説明している。

学生はあらかじめ指導教員と相談し研究テーマを定め、履修登録とは別に学科独自の「申告」を行なう。建築学科における卒業研究の基本となる内容は、以下の通りである。

1. 今日の社会状況のなかで建築の領域での問題を自分で発見し、自ら取り組むべきテーマを設定する。
2. テーマに関連する資料の収集および実験、調査などを行い、適切な分析の上、問題解決の方法を探る。
3. その成果を論文又は設計にまとめ提案する。提案の要約を梗概にまとめるとともに発表を行う。

《点検・評価》

履修する学生全員を対象に「卒業研究ガイダンス」を行い、履修上の注意を徹底している。3年生は4年生の卒業研究発表会に参加した上で、卒業研究申告書を希望する研究室の教員に提出することとし、各研究室における卒業研究の内容を具体的に理解した上で研究室を選択する体制としている。各指導教員は定期的に研究室単位のゼミを実施し、年間を通して継続的に指導を行っている。研究の成果（論文又は設計作品）については、履修者全員が最終発表会で発表を行い、教員全員で研究成果の確認・評価を行っている。

卒業研究については、日本建築学会優秀卒業論文賞などを受賞し、全国的にも高い水準であることが評価されている。

- ・2006年度 日本建築学会優秀卒業論文賞
石見康洋「KEP方式による可変型集合住宅の経年変化」
- ・2006年度 都市住宅学会優秀卒業論文賞奨励賞
関川尚子「フリープラン分譲集合住宅における住まい方の経年変化に関する研究」
- ・2008年度 日本建築学会優秀卒業論文賞
小倉亮 「茶室の自然光に対する空間構成の研究」

《将来に向けた発展方策》

引く続き、卒業研究の円滑な進行を促し、その進捗状況を確認・評価するため、9月末に複数研究室合同による中間発表会を開催し、その結果を教室会議で審議する。進捗状況が芳しくない学生に対しては重点的に指導する。

《根拠資料》

1. 学修の手引(工学部) 2010年度版、同2011年度版
2. 建築学科会議議事録
3. 建築学科ウェブサイト (<http://www.arc.shibaura-it.ac.jp/>)

3-5 具体的な取組内容と成果 (FD/授業改善)

3-5-1 教育目標に沿った成果

《現状説明》

(1) 学生の学習成果を測定するための評価指標の開発とその適用

講義・演習については専任教員、非常勤教員とも、学生アンケートの結果を分析し、次年度にフィードバックするように制度整備されており、実施されている。毎年、非常勤講師を含めた学習成果を確認し、改善点を議論する会議を開催しており、その結果を次年度以降の教育方法の改善に活かせるようにしている。卒業時に実施する満足度調査の結果は教室会議にて専任教員全員に配布し、改善策について議論を行い、必要な対応措置を取っている。

(2) 学生の自己評価

大学が実施している授業アンケート等を活用し、教育目標に沿った成果が得られているかを、学生が自ら確認できるように指導している。

(3) 卒業後の評価 (就職先の評価、卒業生評価)

卒業生を毎年一回、里帰りゼミとして大学に招き、意見交換する機会を活用して卒業後の仕事において、本学の教育目標、それに沿った教育内容が、社会のニーズに対応した成果が得られているかを確認するよう努めている。

(4) 2008、2009年度において教員を1年間、留学させ、教育、研究面での能力向上を図っている。

《点検・評価》

(1) 2010年度における卒業生の進路は、下記のとおりであり、教育目標に沿った成果がほぼ得られていると判断される。

進学：48.5% (内訳：芝浦工業大学大学院 26.7% 他大学大学院 21.8%)

建設関係：42.6%

(内訳：設計事務所 4.0% 建設業 26.7% 不動産業 3.0% 住宅産業 1.0% 設備産業 7.9%)

製造業 2.0%、サービス業 1.0%、公務員 3.0%、その他 3.0%

建築学科より建設工学専攻課程に進学した者の2010年度の進路は

建設関係 82.9%

(内訳：設計事務所 31.4% 建設業 25.7% 不動産 14.3% 住宅産業 8.6% 設備産業 2.9%)

製造業 2.9%、サービス業 5.7%、公務員 8.6%、その他 0%

(2) 授業アンケートや卒業時のアンケートを分析することにより、継続的に授業改善に取り組んでいる。

(3) 就職担当教員が就職先企業の就職担当者と面談する機会を活用して、本学卒業生の就職先での評価を確認するよう努めている。

《将来に向けた発展方策》

(1) 引き続き、授業アンケートや卒業時のアンケートを分析することにより、継続的に授業改善に取り組んでいる。

(2) 引き続き、就職担当教員が就職先企業の就職担当者と面談する機会を活用して、本学卒業生の就職先での評価を確認するよう努める。

(2) 本学の留学制度に基づき、教員の教育、研究面での能力向上を図る。

《 根拠資料 》

1. 学修の手引(工学部) 2010 年度版、同 2011 年度版
2. 建築学科会議議事録
3. 建築学科ウェブサイト (<http://www.arc.shibaura-it.ac.jp/>)

3-5-2 学位授与 (卒業・修了認定)

《現状説明》

建築学科では、下記の通り、ディプロマポリシー (学位認定方針)を設定し、専任教員全員が参加する卒業判定会議 (教室会議) を開催することにより、ディプロマポリシーに基づき、卒業判定、学位授与を行っている。

- (1) 歴史的発展を含めた技術の事象を知ること
- (2) 技術と関連する普遍的法則としての科学を学ぶこと
- (3) 技術が現実社会に現象している状況を認識し、その問題点を提起すること
- (4) 技術の実践を通じてつくることの意味を考えること
- (5) 豊かな人間性や社会性およびコミュニケーション能力を発揮し、社会に貢献する

《点検・評価》

専任教員全員が参加する卒業判定会議 (教室会議) を開催することにより、ディプロマポリシーに基づき、卒業判定、学位授与を行っている。

《将来に向けた発展方策》

専任教員全員が参加する卒業判定会議 (教室会議) を開催することにより、ディプロマポリシーに基づき、卒業判定、学位授与を行われているか、検証を行う PDCA が実施されている。

《 根拠資料 》

1. 学修の手引(工学部) 2010 年度版、同 2011 年度版
2. 建築学科会議議事録
3. 建築学科ウェブサイト (<http://www.arc.shibaura-it.ac.jp/>)

3-6 学生支援

《現状説明》

学生に対してきめ細かな学生支援をおこなうため、専任教員はオフィスアワーを設け、学生との対話の機会を設けている。オフィスアワーの時間については、教員プロフィール、シラバス、研究室前の掲示等を行い学生が教員と面談できる時間帯を周知している。専任教員の電子メールアドレスを学生に公開しており、学生は随時、教員のアポを取ることができる。実態としては、オフィスアワー以外でも、教員在室時には学生が気安く相談できる環境になっている。

実験科目、設計演習科目にはTAを重点的に配置し、卒業研究にもTAを配置することにより、学生が相談しやすい環境を設けている。TAについては大学院学生の資質向上の効果も期待される。

履修指導については、成績表を学生に交付する際に、学修指導する機会を設けるように取り組んでいる。工学部において定めている必要単位数に満たない学業成績不振者に対しては、各学期ごとにクラス担任が面談を行い、適切な履修計画、学修計画を定めるように指導している。4年生においては、取得単位数が110単位未満の学生には卒業研究の履修をさせないこととしており、4年間における無理のない学修が実現できるように学修指導を行っている。4年生については定期的に卒業研究の指導を行い、個別に指導する機会を充実させている。

進学・就職については、毎年12月末に、就職担当の3年生および4年生のクラス担任が個別面談を行い、学生の希望に沿った進学、就職ができるよう指導・助言を行っている。

全国9会場で毎年実施している父母懇談会において、父母と教員の間で、学生の大学、家庭での学習状況、生活状況を意見交換し、学生の学修意欲の向上、進路に関する検討の深化などに資するように努めている。

《点検・評価》

オフィスアワーの開設、各学期初めの学修指導、学業成績不振者に対する面談により、適切な履修計画、学修計画を定めるように指導している。4年生については卒業研究のゼミにおいて指導する機会を充実させている。

《将来に向けた発展方策》

3年生が夏季休暇中に履修する「建築実習」は、学生が社会に触れ、自らの進路について考えることのできる良い機会となっている。

《根拠資料》

1. 学修の手引(工学部) 2010年度版、同 2011年度版
2. 建築学科会議議事録
3. 建築学科ウェブサイト (<http://www.arc.shibaura-it.ac.jp/>)

3-7 その他

特になし

4. 学科（学群）等運営の貢献

4-1 学科運営への協力状況

《現状説明》

建築学科の定常的運営業務については、全ての専任教員が協力して分担し、各種業務に対応している。主な業務として、学科主任、クラス担任、予算担当、就職担当、入試委員、カリキュラム担当、オープンキャンパス担当、プレゼミ担当、ゼミナール1担当があり、負担の均等、教員の人材育成、業務内容の継続性等を考慮しながら、毎年、年度当初に担当者を教室会議で決定している。

建築・土木学群では、下記の通り、教育理念・目標を定めており、建築学科の教育内容も学群の掲げる人材育成目標に即したものとなっている。

幅広い視野を持ち建築・都市・社会基盤を創造できる、責任感ある専門家を育成します

私たちの暮らしや経済・産業活動は、建築、都市、国土の中で営まれています。本学群が教育研究の目的とする「建築」と「土木」は、そうしたさまざまな社会活動の基本となる舞台を創る学問分野です。これからの時代は、地球環境問題を直視して自然と調和しながら、かつ地震や洪水などの災害に強い、次世代に豊かな生活や文化を継承し続けられる舞台装置を求めています。本学群では、従来の枠を超えた教育により幅広い視野を養い、時代が求める変化に適応できる創造力豊かな人材を育成します。

《点検・評価》

専任教員採用計画において、学科教室会議、学群会議を通して、将来計画を見据えた議論ができるようになっている。

学科の定常的運営業務に関しては、毎年、半数を交代するなど担当者がローテーションするように配置しており、一定期間に全員がすべての業務を経験するように配慮している。したがって、経験者が助言することにより、初めて業務を担当する若手教員の負担が過度になることはない。一通りの教室の業務を経験することは、若手教員の人材育成の観点からも好ましいといえる。

《将来に向けた発展方策》

専任教員採用計画において、建築工学科と意見交換を行っている。

《根拠資料》

1. 学修の手引(工学部) 2010 年度版、同 2011 年度版
2. 建築学科会議議事録
3. 建築学科ウェブサイト (<http://www.arc.shibaura-it.ac.jp/>)

4 - 2 学科運営方法

《現状説明》

建築学科では、定期的に教室会議を開催し、主任会議の報告のほか、学部、学群に関する懸案事項の検討を全教員参加のもとに行っている。教室会議議事録は、議事録担当教員が作成し、メールなどで確認を取った後、建設系書記センターにて保管されている。これらの資料は、全教員が自由に閲覧できる。

《点検・評価》

建築学科では、定期的に教室会議を開催し、学部、学群に関する懸案事項の検討を全教員参加のもとに行っている。

《将来に向けた発展方策》

PDCA の充実のため、教室会議の場で全教員参加のもと、議論を行っている。

《根拠資料》

1. 学修の手引(工学部) 2010 年度版、同 2011 年度版
2. 建築学科会議議事録
3. 建築学科ウェブサイト (<http://www.arc.shibaura-it.ac.jp/>)

4 - 3 その他

学科運営に関して、建設学群書記センターによる支援がなされている。

5. その他の特記事項

5-1 卒業生の社会評価など

《現状説明》

建築の各分野において、職業人としての信頼を獲得し、責任ある立場で活躍している卒業生が多く、本学教員、本学法人理事などの職についている卒業生もいる。

例：五十嵐久也芝浦工業大学理事長など。

《点検・評価》

建築学科卒業生による建築会が名簿を毎年、発行し、卒業生の卒業後の勤務状況などを定期的に把握している。会報の発行、ウェブサイトの開設を行い、最新の情報が得られるよう取り組んでいる。

一級建築士の合格者が全国の大学において第5位にランクされた(2010年度)。

《将来に向けた発展方策》

建築の各分野において、職業人としての信頼を獲得し、責任ある立場で活躍できる卒業生をより一層、育てていく。

《根拠資料》

1. 学修の手引(工学部) 2010 年度版、同 2011 年度版
2. 建築学科会議議事録
3. 建築学科ウェブサイト (<http://www.arc.shibaura-it.ac.jp/>)
4. 芝浦工業大学建築会名簿

5-2 その他

特になし